



Title	E P A 介護福祉候補者は何ができるようになったのか ー就労開始後 1 年間の縦断的インタビューを通してー
Author(s)	藤原, 京佳
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/70711
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

	氏 名 (藤 原 京 佳)
論文題名	EPA 介護福祉士候補者は何ができるようになったのか — 就労開始後1年間の縦断的インタビューを通して —
論文内容の要旨	
本研究は EPA 介護福祉士候補者が就労開始後の1年間に何ができるようになったかを探求したものである。 第1章では本研究に至った個人的経緯と介護職の人材不足を背景にした外国人の受け入れ拡大に関する議論を概観し、EPA 介護福祉士候補者を研究対象に置く意義を述べている。 第2章では、EPA 介護福祉士候補者の受け入れ制度の概要を提示し、その後 EPA 介護福祉士候補者の日本語能力・学習に関する先行研究を概観している。 第3章では、理論的枠組みを提示している。一つは看護・介護職に携わる者に求められる知識、態度、技能を「認知領域」、「情意領域」、「精神運動領域」という3領域として提示した教育目標(田島, 2009)である。二つ目は感情労働である。本研究では感情労働を職場において他者と感情的にかかわりをもつこととし、看護や介護においては他者への関心や関与の中で行われるものとした。また、本研究では利用者への感情労働を考察の軸としながらも、それを支える同僚や上司との関係性についても見ることにしている。三つ目は言葉の学習に関する枠組みで、専有と呼ばれる概念である。専有とは他者と従事する相互行為の中で自らの志向にもとづき、その意味を自分のものとしていくことだと定義づけている。 第4章では協力者の「固有の物語」(ステイク, 2006)を記述するケース・スタディについて整理している。その後、物語による理解を可能にする「語り」について論じ、語りをインタビューデータだけではなく、ストーリーとして捉えていくことを述べている。 第5章はマワールさん、アルファティさん、サリさんという3名の協力者に調査協力を依頼し、就労開始直後から1年間のインタビューを主なデータとしていることを提示している。データは逐語的に文字化し、その後、各協力者の1年間のストーリーを作成することで分析を行っている。 第6章はマワールさんのストーリーと考察で、マワールさんのストーリーからは以下のことがわかった。まず、3領域において、マワールさんは①仕事の流れとその仕事の意味を理解するようになり、②ユニットの状況を理解して、自ら行動するようになっていた。さらに、③入居者の状況に合わせた介助と声かけができるようになり、④個別の入居者への認識を変容させ、理解を深めていた。最後に、⑤介護記録を書くようになっていた。 感情労働について、マワールさんは入居者を大切にするという価値を見出していたが、これは母親が入院していた時に出会ったあこがれの看護師にもとづいており、さらに施設で塚本さんに指導される中でその価値を実践で具体化していた。また、利用者に否定的感情を抱いた際に、それをコントロールするよりどころとなっていたのが「わたしの命」という天職としての仕事観であり、上述した高校生の時に出会った看護師がきっかけとなっていた。また、マワールさんは冗談のほか、言葉を用いないコミュニケーションや、日本語以外の言語リソースを用いたコミュニケーションも行っており、これらはいずれも入居者への関心の中で行われた「贈り物」であった。このほか、入居者だけでなく、職員への関心も見られ、職員間の感情労働を実践していた。 専有について、マワールさんは「不穩」を認知症を生きる西さんを理解するための言葉として使い、また、「おばあちゃん」という言葉を釜本さんや西さんを敬慕したいという思いを表すものとして使っていた。一方、水町というユニットや職員に目を向ける中で用いられていた言葉もあった。「えらい」は水町のメンバーとしての言葉となっており、「できればわたしがやる」は水町のメンバーとしての役割を果たしたいという思いを表すものになっていた。さらに、マワールさんは「気持ち」という言葉を仕事の中で他者とつながることの価値を見いだす言葉として使っていた。さらに、「訪室」や「誘導」は介護記録を書くことが意味のある仕事であると認識される中で用いられていた。 第7章はアルファティさんのストーリーと考察である。アルファティさんは3領域において①デイサービスの仕事を理解するようになり、②トイレに関する援助行為をするようになっていた。そして、③状況に応じて「flexible」に対応するようになっていた。さらに、④利用者に合わせた対応もとるようになり、⑤見守りを具体的な行為として実践するようになって	

いた。

感情労働について、アルファティさんは自らの仕事を利用者とコミュニケーションを通して人間関係を構築するものとして捉えていたが、こうした価値はアルファティさんの他者とつながることへの関心にもとづいていた。また、利用者に否定的な感情を抱くことや他の職員が利用者を怒ることに後悔や残念な気持ちを感じており、そのよりどころとなっていたのがイスラム教やインドネシアの社会規範であった。また、利用者への関心にもとづくコミュニケーションとして冗談や歌があった。アルファティさんにとってこれらは自分にとっても喜びとして捉えられ、「贈り物」になっていた。一方、職員との間では「怒る」「怒られる」関係性が構築されており、特に上司との間で顕著であった。また、アルファティさんが大切にしているイスラム教に関しても職員の理解が必ずしも十分に得られているわけではなかった。

専有について、アルファティさんは言葉遊びや冗談を行っており、これらは利用者とコミュニケーションを通して関係を構築するという関心にもとづいていた。また、冗談の中で用いられた「おかあさん」という言葉も、介護職員と利用者にとどまらない親しい関係を表象するものとして理解することができた。一方で、職員との関係に関して「怒る」という言葉は「partner」として他者と対等な関係を築くことを阻み、他者の尊厳を傷つけるものとして捉えていた。さらに、「天国」という言葉はイスラム教徒としてのアイデンティティを構築する言葉になっていた。

第8章はサリさんのケースである。サリさんは3領域において、①デイサービスの利用者を知るようになっていた。また、②慎重な態度で仕事に取り組み、③さまざまな介助技術や知識を自分のものとしていた。さらに、④利用者に根気よく対応し、⑤排泄物を抵抗感なく扱っていた。

感情労働について、サリさんは自らの役割を利用者の気持ちをよくすることだと考えていたが、こうした介護の価値は父親の入院の際に出会った看護師を反面教師とすることにもとづいており、サリさんは看護師と真逆のことを行うことで「いい看護師」を体現していた。また、利用者に否定的な感情を抱いた際、自らを罪の多い「普通の人」として認識することで否定的な感情を許容し、利用者の忘れるという特性を利用しながら、そうした気持ちを持続させないようにしていた。同時に、サリさんにとっては癒される存在としての利用者があることも「いい看護師」としての自分を想起させるのに役立っていた。また、利用者への関心にもとづくコミュニケーションとしてハイタッチや敬礼、じゃんけんを行っており、利用者の身体的・認知的状況などを考慮していた。そうしたコミュニケーションはサリさんにとって楽しいものであり、「贈り物」になっていた。一方で、職員との間には心理的な距離が見られた。

専有について、「自分が決めたこと」というフレーズは看護師という仕事にかかわる願望や自負、喜び、覚悟を表すものになっており、サリさんにとって「いい看護師」を体現する上で必要な言葉になっていた。また、利用者に待ってもらう際には「いい理由」を付加すべきだと考えており、利用者への配慮が表されていた。また、「無理やり」という言葉は長嶋さんの主体性を奪う不条理なものとして捉えられていた。最後に、「癒される」という言葉は、特定の利用者に対して用いられ、「いい看護師」を体現するのを支える言葉になっていた。

第9章は3人のケースを通して見えてきたことについて述べている。まず、介護の価値のよりどころは多元的な自己認識にもとづくものであることがわかった。次に、そうした介護の価値を支える環境としての職員同士の関係については、EPA介護福祉士候補者の先輩がいることを含め施設の受け入れ態勢が整っていることが必要で、ユニット型という施設形態は職員同士の支え合いが生まれやすい可能性が示唆された。そして、介護の価値は仕事に関する知識や技能の獲得と連動していることもわかった。さらに、介護の仕事の価値は特定の言葉としても表れており、自分の仕事や他者を理解するための生きた言葉になっていた。最後に、3人は非言語も含めた多様な形態のコミュニケーションを行っており、ここにもそれぞれの介護の価値が反映されていた。

第10章では本研究の意義として三点指摘している。まず、EPA介護福祉士候補者ができるようになったことを見たことで、彼・彼女らが問題に対し主体的かつ能動的に取り組む人たちであること、彼・彼女らの経験が多様で複雑なものであることが示せたという点である。また、介護の価値を職業上の自己認識にもとづくものだけではないことを明らかにした点も挙げられる。さらに、就労現場で必要な言葉に関する議論を当事者としてのEPA介護福祉士候補者の視点から行っていく必要性を指摘したことも挙げられる。今後は、国家試験の学習も含めた広い視野からEPA介護福祉士候補者の就労経験を捉えると同時に、より長期的に調査していくことが課題となる。また、非言語も含めた日本語以外のリソースによるコミュニケーションを日本語教育の中でどのように扱っていくかを議論していくことも必要となる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (藤 原 京 佳)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	マシユー・バーデルスキー
	副 査	大阪大学 教授	石井正彦
	副 査	大阪大学 准教授	高木千恵
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：EPA 介護福祉士候補者は何ができるようになったのか ― 就労開始後 1 年間の縦断的インタビューを通して ―

学位申請者 藤原京佳

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 マシュー・バーデルスキー

副査 大阪大学教授 石井正彦

副査 大阪大学准教授 高木千恵

【論文内容の要旨】

本研究は、日本の介護施設で働いている外国人の EPA（経済連携協定）介護福祉士候補者が最初の 1 年間を通して何ができるようになったかを明らかにしようとするものであり、「はじめに」と「おわりに」を含め 10 章、A4 判 238 ページからなっている。

第 1 章「はじめに」では、本研究に至るまでの個人的経験、研究背景及び本論文の構成を述べている。

第 2 章「EPA による介護福祉士候補者の受け入れ制度と先行研究」では、介護施設において、2008 年から介護福祉士候補者の受け入れ制度が重要な役割を担っていることを述べ、その意義と課題を挙げている。続いて、この制度では、介護福祉士の日本語能力や学習をめぐる議論が受け入れ開始から現在に至るまで続いており、介護福祉士候補者に関する研究を説明している。そして、これまで EPA 介護福祉士候補者の日本語能力・学習に焦点を当てた調査研究が十分に行われてきていないことから、本研究の課題を、彼らが就労現場で何をし、そのために必要な能力やスキルなどをどのように獲得しているか、そして言葉がどのように関わっているかを設定している。

第 3 章では、本研究の課題に取り組むための理論的枠組みを提示している。まず、看護・介護教育を概観し、看護における教育目標を理解するためには、「認知」、「情意」、「精神運動」という 3 領域に注目し、介護士候補者を捉えなければならないことを確認している。その後、ボックシード (2000) が提唱した感情労働の先行研究において感情労働がいかに定義されているか、またケアの場面における感情労働の再定義を説明している。そして外国人ケアワーカー及び同僚と利用者との関係性に関する先行研究を述べている。それに基づいて介護候補者の言葉及び能力やスキルの獲得を理解する必要があることを述べ、上述の 3 領域を援用して本研究の課題に取り組むことを述べている。最後に、本研究のリサーチ・クエスチョンを設定している。

第 4 章「方法論」では、まず人間の考えや経験を理解することを目指す上で、認識論的な立場の必要性を説明し、本研究では、質的ケース・スタディの手法を用いることを述べている。具体的に、調査協力者のインタビューにおける「語り」に着目し、その分析の枠組みとしてブルーナー (1998) が提唱した「語り」という概念を援用している。

申請者は、研究者が協力者の語りの生成に深く関与することが孕む問題とその問題を軽減しようとするリフレ

クシヴィティという戦略を取り、語りは協力者一人で語るものではなく、協力者と研究者の間に協働構築するという概念にも言及している。

第5章「調査概要」では、調査協力者の3名を紹介し、本研究で彼らを取り上げるに至った経緯と、協力依頼の手続きを説明している。続いてインタビューの実施方法、データの保管、データ分析の方法、データの提示方法を記している。

第6章から第8章の分析では、それぞれの協力者と筆者との出会い、インタビューの経過の記述、彼らが働く介護施設の概要、彼らの語りに関する分析を示している。

第9章「3人の協力者の考察」では、第6章から第8章に示した分析に基づいてそれぞれの共通点と相違点について考察を行っている。共通点として、語りは、3人の調査協力者、それぞれの人生に一貫性を持たせるものであり、介護施設で働き始めるまでのそれぞれの経験や将来についての語りの中で、常に自分自身が主役であったということが挙げられている。他方、相違点として、語りを通していかに協力者それぞれが他者とは違う自分自身の人生を歩んできたかが言及されている。

10章「おわりに」では、リサーチ・クエスチョンに対して、次のように答えている。(1) 3名が介護に関する知識、価値、技能などが、実践でできるようになった。(2) 他者との感情的にかかわりについて、介護をする立場に立つとき、利用者等に対する否定的な感情をもった際の感情のコントロールや対応をすると同時に彼らとの関わりに喜びを感じることもできうということ。(3) 3名はそれぞれ専有した言葉が異なるが、それらの言葉を通して、仕事の内容、入居者・利用者や他の職員を理解した。最後に今後の課題を示している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、要旨、理論的背景、研究方法、データ、その解釈と考察が過不足なく丁寧に書き込まれており、論理的な議論が構築されている。先行研究は、高齢化社会において介護現場における人材不足という社会的変化・問題を背景にした介護施設の現状、2008年に始まった外国からのEPA介護福祉士候補者受け入れの歴史、介護福祉士候補者や異文化ケアなどの研究の重要性、研究方法論としての語りの妥当性が述べられており、申請者が幅広い正確な知識を持っていることが示されている。調査協力者とSKYPEおよび対面による約75時間のインタビューを丁寧な聞き取りと、慎重な解釈によって描かれた調査協力者3名（マワールさん、アルファティさん、サリさん）の語りは、審査担当者がEPA福祉士候補者の経験、価値観や考えなどを深く理解することを可能にしている。申請者は、それぞれ個人の比較によってリサーチ・クエスチョンの答えを導き出し、説得力がある議論を展開している。それは、(1) EPA介護福祉士候補者は介護の現場で働く最初の1年間に「認知領域」、「情意領域」、「精神運動領域」において何ができるようになったのか、(2) 他者との感情的にかかわりについて彼らは介護に関する価値をどのように自分のものにし、そうしたかかわりをどのように捉えているのか、(3) 彼らは利用者や他の職員とのやりとりの中でどのように言葉を専有しているのか、の3つである。申請者は、価値、能力、技能などは人間の頭の中に存在するものだけではなく常に相互行為の中で現れるものという自身の理解を基に答えを導き出した。

本研究は、現在のEPA介護福祉士候補に適する日本語能力や仕事に関する知識や技能を高め、育てるにはどうしたらいいのかという議論および今後、ますます深刻化する日本社会における高齢化の問題や介護施設をめぐる社会の変化に対し、いかにEPA介護福祉士を位置づけるのかに関する最先端の議論に繋がるものであろう。

本論文には博士論文としての不足な点はほとんどない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。